

105 佐藤の家 裏木戸・庭

つぶれかかったような家。

佐藤、縁側の奥へ声をかける。

佐藤「おい」

とたんに、

「お帰りなさい！」

と、子供の声……十歳ぐらいを頭に、三人の子供が

飛び出て来て、佐藤にかぶりつく。

佐藤「暑いなア、お前たちは！」

子供たちが可愛くて堪らないという顔。

佐藤「おじちゃんにいらつしやいませをしないか」

子供たち、

「いらつちやい」

と、一斉に村上に頭を下げる。

村上「いやア……僕アまだ仕事の続きかと思って……」

佐藤「フッフ……さ、上がらないか」

佐藤の妻、とみが出て来る。

とみ「お帰りなさい」

佐藤「本庁の村上君だ」

村上「お世話になってます」

とみ「いいえこちらこそ……さ、むさ苦しいところですが、ど

うぞお上がりになって」

106 同 六畳間

佐藤「配給のビールがあるのを思い出してね」

村上、鴨居を見上げる。

古びた額に入った表彰状がずらりと並んでいる。

村上「大変なモンですね」

佐藤「なアに、コツコツ歩き廻っただけさ……二十五年前に十

三円五十銭の初任給を貰ってから、さてどのくらい靴をは

き潰つぶしたか……」

村上「一つ一つに、いろんな思い出があるんでしょうね」

佐藤「そう……要するに随分いろんな事があったよ」

とみ、佐藤を呼ぶ。

とみ「あなた、ちよつと……」

佐藤、とみの元に行く。

とみ、佐藤に囁く。

佐藤「(頷いて)……君、突然で何もないんだが、カボチャで辛抱してくれんか」

(O・L)

夜——二本のビールに、ほろ酔いの二人。

外はうるさい程の蛙の鳴き声。

佐藤「俺の家もごらんの通りのあばらやだが、遊佐のどこもひどいネ。人間の住まいじゃないな、あれは……汚い物にはウジが湧くつてもンかな……」

村上「世の中に悪人はいない。悪い環境があるだけだ……そんな言葉がありますが、遊佐という男も考えてみりや可愛そうですね」

佐藤「いかんいかん、そう言う考えは俺たちには禁物さ。犯人ばかり追い廻しているとよくそんな錯覚を起こすが、一匹の狼のために傷ついた、沢山の羊を忘れちゃいかんだ……あの額の半分は死刑囚だが……大勢の幸福を守ったという確信がなかったら、刑事なんてまったく救われない」

村上「……」

佐藤「犯人の心理分析なんて小説家にまかしくんだな……俺は単純にあいつらを憎む……悪い奴は悪いんだ……」

村上「僕アまだ、どうもそう言う風に考えられないんですよ……長い間戦争に行つてる間に、人間あいだって奴が極く簡単な理由で獣になるのを何回も見て来たもンですから」

佐藤「君と僕の年齢の差かな……それとも時代の差かな……なんとか言ったね……アプ……アプレ……」

村上「アプレゲール……」

佐藤「あ、それぞれ……その戦後派って奴だよ君は……遊佐もそうかもしれん……君には遊佐の気持ちこころが解り過ぎるんだ」

村上「……そうかも知れませんが……僕も復員の時、列車の中でリュックを盗まれたんですよ」

佐藤「ほう！」

村上「ひどく無茶な毒々しい気持ちになりましたね……あの時
だったら強盗ぐらい平気でやれたでしょう……でも、ここ
が危ない曲がり角だと思ひまして……僕は逆なコースを選
んで今の仕事を志願したんです」

佐藤「……フフ……やっぱりね」

村上「は？」

佐藤「いや……つまりその……アプ……アプレ……」

村上「アプレゲール」

佐藤「うん……アプレゲールにも二種類あるんだな……君みた
いなのと、遊ゆ佐さみたいなのと……君が本物だよ……遊ゆ佐さみ
たいなのは……アプ……アプレかえる蛙かえるだ！……いやアキレケ
ールさ……ハハハ」

村上「ハハハハ」

村上も久し振りに笑う。しかし、すぐに眉根をよせ
ると、

「……ところで、明日あすはどう言うことにしましょう？」

佐藤「まあまあ、そうあせるな」

村上「しかし、遊ゆ佐さがああの金かを使い果はたしてしままったらと思おう
と落ち着ちいていいられないんです」

佐藤「フム……服装をかえるだけで半分はとんでるな……」

村上「犯行の日からもう一週間ですからネ」

佐藤「一日六千円ペースか……我々なら一月暮らせる……」

村上「じゃ……失礼します」

佐藤「そうか……とみ……とみ……おい……お帰りだよ……と
み……」

とみ、隣室から出て来る。

とみ「だだいま、寝ついたものですから」

佐藤「うん、寝たか……」

と、隣室を覗き、

「君、ちよつと……見てくれ」

村上、佐藤に促されて部屋を覗く。

子供たち屈託なく寝入っている。

佐藤「ハハハ、まるでカボチャ畑だな」